

3

卒業生・在籍生・元教職員による エピソード Remiscences

医療疫学分野の思い出

医療疫学分野の在籍者として実のある情報の発信を

鈴嶋 よしみ

【在籍】平成12-17年度／リサーチレジデント・非常勤講師・助手

【現在】東北大学大学院医学系研究科 肢体不自由学分野 講師



Yoshimi Suzukamo

医療疫学分野には、設立時(当時は“理論疫学”)より6年間在籍しました。初年度の京都の夏は、街中がサウナのように感じられて毎日ぐったりしていましたが、2年目には感じなくなりました。人間の体は環境に適応するようにできているのだなあと妙に感心したことを覚えています。当時の教室は総合解剖センター棟にあり、教授室脇の細長い狭いスペースに、秘書さんとともに机を並べていました。

当時から、医療疫学教室は日本国内外の他研究室、他大学と共同して行うたくさんの研究を抱えていました。これは、福原教授の仕事や医療疫学そのものが多くの研究者から求められていることの証であり、現在まで続く医療疫学分野の特色の一つであると思います。当時大学院を修了したばかりの私にとっては、大変さよりも研究に携われる面白さの方が勝っていました。これまで本の中の人でしかなかった、その分野の一流の臨床家や研究者と一緒に仕事ができるのですから、本当にわくわくしました。特に人より遅れて研究活動を開始した私にとっては、のどから手が出るほどほしい得難い体験であり、まさに寝る間を惜しんで仕事に明け暮れる日々でした。担当している研究を数えてみたことがありますが、一時に40以上の研究プロジェクトを抱えていたこともありました。

それでも最初のころは学生数も少なくまだ時間的な余裕があったように思います。福原教授や秘書さんたちと、吉田山山頂にある景色のいいカフェにランチをしにいったこともありました。目の前に坂道が現れるや否やすごいいきおいで駆け上がり、次第に小さくなる福原教授の後ろ姿は、いまだに記憶の中のアルバムの1頁を占めています。

平成18年より東北大学大学院医学系研究科障害科学専攻機能医科学講座肢体不自由学分野に異動し、講師職を務めています。“障害”を共通のテーマとして集う多くの大学院生の指導に携わるとともに、“障害”を抱える方々のQOLを考える新たな研究プロジェクトを展開しています。医療疫学在籍中には私自身がPrincipal Investigatorになることはなかったのですが、今はPIとして研究プロジェクトを運営しなければなりません。医療疫学分野でさまざまなBig projectに関わらせてもらった数々の経験の一つ一つが、今に活かされています。例えば、研究会議の際にどんなお弁当を出すかについて、福原教授と秘書さんが本当に苦心されていた姿を思い出します。そういった細やかな気配りを見せていただいたことも、貴重な経験の一つです。

今振り返れば、大学院を出たばかりのひよっこに、よくもこんなたくさんの大事な仕事を任せてくれたものだと思います。福原教授のふところの大きさにあらためて感謝いたします。研究活動を医療疫学で開始できたことは幸運でした。そこで得た経験の一つ一つが全て、私の今の活動、そして将来の活動の基礎を築いています。

この10年で、医療疫学分野は多くの優秀な人材を輩出されました。皆さんの発表された論文やご活躍の様子を垣間見るにつけ、その教室に在籍したことを誇りに思うと同時に、今、その外にいることに一抹の寂しさを感じます。しかし、私自身も医療疫学を巣立った一人として、障害科学分野での研究・教育活動に邁進し実のある情報を発信していくことが、私を育ててくださった教室への恩返しになるものと思っております。医療疫学分野のますますのご発展、教室員の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

医療疫学分野で学んだこと

MCRで学んだ教育者としての視点

森田 智視

【在籍】平成16-18年度／講師 【現在】横浜市立大学大学院医学研究科 臨床統計学・疫学 教授



Satoshi Morita

医療疫学分野10年のあゆみに寄稿させていただくことを大変光栄に思います。医療疫学分野には平成16年1月から18年10月まで講師としてお世話になりました。今考えますと、とても生意気な？教員だったのではないかと思います。そんなわたくしをやさしく見守ってくださった福原先生、医療疫学の皆様に感謝いたします。医療疫学分野は現在G棟にありますが、その前は解剖棟にありました。福原先生を中心に、現在は東北大学におられる鈴鴨先生と“わきあいあい”とした雰囲気の中、とても楽しくかつ充実した日々を過ごさせていただいたのではないかと思います。着任と同時にまず取り掛かったのが現在も続いているMCRの立ち上げでした。特に臨床統計パートの立ち上げに注力しました。実は、今の職場で実践している臨床統計教育プログラムはその時に立ち上げたものをベースにしています。医療疫学、すなわち福原先生から学んだ(盗んだ?)最大のポイントは大学での‘教育’活動面であるといえます。研究面も確かに重要ではありますが、学生の教育さらには後進を育てていくことは大学に籍を置くものの責務であると思います。

現在、わたくしは横浜市立大学の臨床統計学・疫学分野を運営しています。ミッションは横浜市大が(中心となって)実施する臨床試験のサポートと大学院での臨床統計学の教育であります。京大と違い、規模が小さいため比較的意思決定が早いという利点がありますが、研究費取得などの面ではとても苦労しています。福原先生から学びそこなった？のは、どうすれば研究費を取得できるかというところかもしれません。今からでも教えていただきたいと思っているのですが「それは自分で見つけてね」といつもの笑顔でさらっと流される気がします。

今後の行動目標ですが、臨床試験のインフラストラクチャーを横浜に作り上げることです。日本の臨床試験が海外のものに比べ、見劣りしてしまう大きな理由の一つとしてインフラの未整備を挙げることができると思います。現在、中国、韓国、台湾などのアジア諸国では臨床試験や治験のインフラ作りに大きな投資をしています。この流れに乗り遅れてしまつては大変なことになります。本当に微力な活動ではありますが、日本が前に進むことに少しでも貢献できればと考えています。日本の臨床試験の推進のため、京大医療疫学で経験したことを自分の中の“ものさし”にして今後全力で突き進んで行きたいと思っております。最後になりましたが、福原先生と京大医療疫学分野の皆様のご健康、今後のご活躍を祈念いたします。

暴走族か、珍走団か

医療疫学からUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)RAND研究所へ
～診療の質評価指標をつくる～

東 尚弘

【入学】平成12年度/博士後期課程 【現在】東京大学大学院医学系研究科 公衆衛生学 准教授



Takahiro Higashi

私は研究者としてのスタートは医療疫学で切った。それがその後現在に至るまでの暴走人生につながっている。まっすぐ行っただと思えば magari、下ったと思えば登り、安定とは無縁である。決して人に勧めないが、その一端を紹介したい。

私は医療疫学がまだ理論疫学といわれていたころに入学した。疫学が何かということも全く知らず、統計学の親戚というぐらいの認識しかなかった。また現在専門の「ヘルスサービス」という言葉も全く知らなかった。それでも福原教授の勧めで入学後すぐにUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)の総合内科ヘルスサービス部門に留学した。これが人生の転機である。臨床研究の勉強をするつもりが、全くお門違いであった。現地で「ヘルスサービス研究だ。臨床研究じゃない」と言われて愕然とした。でも幸い、問題意識を共有できる医療の質研究が盛んだった。その分野に転向し、近くのRAND研究所での高齢者医療の質評価研究チームに参加した。当初2年の予定が結局5年近く留学することになった。医療関係の長期留学につきものなのは貧乏。当地の研究補助と福原教授の送ってくださる仕事で食いつないだ。

貧乏だったが任せてもらえた研究はなぜか当たった。米国総合内科学会の全体集会で口演をすることになった時は足が震えた。UCLAの指導教官の2人が前日夜中の会場に私を連れ出し、暗がり練習につきあってくれた。考え得る限りの意地悪な質問を考えてくれ、それに答える練習をし、最後に「今のような質問に答えられれば大丈夫だ」と言ってくれた。教授の勧めでUCLAに留学して本当に良かったと思った。

苦労は多かったが何とか目標は達成して帰国することはできた。帰国後は医療疫学で特任助手として着任、MCRの立ち上げに取り組んだ。他の教室の先生から「先生、暴走族の仲間に入っちゃったんだね」と言われ、そんなもんかな? と思いながらも全力疾走した。しかし、本職の、医療の質という、微妙な立場の研究をするのに若手の自由な研究という位置づけはつらかった。専門家の先生に話をするのは気を遣った。大半の作業を1人でやるのはつらかった。最後の重要なところで悩んで教授に相談した時に、何か急ぎの用がありそうだった教授が手を止めて1時間以上もつきあってアドバイスをくださったときは涙が出た。しかし、アメリカの豊富な資源を使った研究に慣れそのレベルを求めていたため、つらさは続いた。やることは山ほどある。でも満足な論文に仕上げるまでには道はまだまだ遠い……。

少し疲れ気味の時に、国立がんセンターから声がかかった。

「がん対策基本法の成立で、これからがん診療の質評価が必要になる。我々が調べたところ質評価の方法論はRANDから発しているようだ。先生はRANDにいたと聞いたから、その経験を生かして診療の質指標を作る研究に参加しないか」

夢のようだった。教授も異動を許してくれた。そこから、がんの診療の質評価指標を作る研究をし、その続きで現在仕事をしている。まだまだ、診療の質が測定され改善され国全体の診療の底上げをしていくには遠いが、今年からは、医療疫学院生の中村文明先生も一緒に仕事をしてくれることになり、着実に進んでいると思う。

最近、「暴走族」はイメージが良すぎるので「珍走団」と呼ぶという動きがあるらしい。私の生き方は「珍」の方に近いのかもしれない。でも、珍しいことは貴重なことである。思えば福原教授、医療疫学との出会いからこそ貴重な体験が可能であったと思う。本当に感謝の一言しかない。教室のますますの発展をお祈り申し上げます。

医療疫学教室への感謝

充実した大学院生活をふりかえる

三宅 達郎

【入学】平成15年度／専門職学位課程 【現在】大阪歯科大学 口腔衛生学講座 准教授



Tatsuro Miyake

医療疫学教室10周年、おめでとうございます。また、福原教授には、入学時から現在まで多大なるご厚情を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。「よい事だと思ったら迷わず進め、人生において遅すぎるという言葉はない」と自分に言い聞かせながら、歯科医師になって20年後の平成15年4月に、医療疫学教室の仲間に入れていただきました。毎日が目からうろこ状態で、「入学してよかった」と喜びを嘯みしめておりましたが、働きながら学ぶということで、福原教授をはじめ医療疫学の先生方には、いろいろとご迷惑をおかけしたと思います。入学後1年経っても、まだ具体的な研究計画が立たないなど、今思い返しても赤面することばかりです。しかし、福原教授のおおらかで大きな愛情に包まれながら、充実した大学院生活を過ごさせていただきました。赤面といえば、当時、福原教授は歯痛に悩んでおられ、教授室で簡単な応急処置を行っていましたが、いっこうに改善せず、以後、福原教授は長期間歯痛に苦しまれることになります。私は、研究計画だけでなく、歯科の診断に関しても甘さを露呈することになってしまい、今でも恥ずかしく思う次第です。

しかし、何より申し訳なく思っておりますのは、せっかく熱心にご指導いただいたにもかかわらず、その後、然したる研究成果を残していないことであります。卒業直後、歯科領域は疫学研究の宝庫のように思い、あれもしよう、これもしよう、と心弾ませておりましたが、いろいろな問題が生じてしまい、結果は挫折の連続でした。私にもう少し研究に対する執念のようなものがあれば、乗り越えられた問題であつたと反省しております。15周年、さらに20周年の記念誌には、胸を張って研究成果が報告できるようにチャレンジしていこうと思っております。

数年前、福原教授から今後の人生の目標は「人を育てること」だとお聞きし、深く感銘を受けたことがあります。そして、その後、数多くの有能な人材を着実に育ててこられ、福原教授から薫陶を受けた方々が、さまざまな分野で活躍し、ときには協力しながら社会貢献されております。私もその中の一員になることができればどんなに幸せだろうと思いますし、また、そうなれるように今後努力していく所存です。

私にとって医療疫学教室は、単なる研究機関ではなく、故郷のような心のよりどころになるかけがえのない存在です。医療疫学の益々のご発展を祈念しております。

ターニングポイントを迎えた医療疫学とのであい

小崎 真規子

【入学】平成16年度／博士後期課程

【現在】京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 医療疫学分野 研究員 田附興風会医学研究所北野病院 健診部



Makiko Ozaki

1. 医療疫学在籍時の思い出

今から振り返ると在籍した時期というのは、人生のターニングポイントだったと思います。入学から遡ること1年少し前、臨床で疲弊していた私はかねてからの興味の対象であった臨床研究のスキルを学ぶため、進学を決めました。その後は慌ただしく、異動先の上司の説得、産休中の受験勉強、産休明け直前の入試を経て、合格が決まった後は京都での子供の保育園探しをし、当時7ヵ月だった娘と桜満開の京都でなんとか前期のコースワークを始めました。娘は幸い市内の保育園に入れましたが、子育てと必修単位で余裕がなく、選択コースを取れなかったことを覚えています。前期終了後は新潟での勤務に戻りましたが、ミーティング等で京都に来るにしても新潟からだと日帰りというわけにもいかず、日程を調整するのが大変でした。そういう生活も夫の事情で3年目に一家で京都に住むようになって楽にはなりましたが、子供の病気や入院などで予定通りにはなかなかいかず、遠方の病院にデータを取りにいく日に発熱され、急遽他の日に変更してもらったこともありました。研究の進み具合も勘案して、2人目の出産の時には1年間休学し、結局4年かけて課程終了となりましたが、福原先生はじめ周囲は長い目でサポートして下さいと感謝しています。このように在学時の思い出は、子育てとの両立に苦労した記憶がほとんどですが、講義その他で学んだことは多く、特にコースワーク以外の活動(実習やワークショップ)や共同研究などを手伝わせてもらったことは貴重な経験となり、自分でやるときにとっても役立ちました。

2. 医療疫学を出てから

現在は病院で週4-5日人間ドックをし、週1日、大学で研究、教育に関与しています。医療疫学を出て感じるのは、病院(医療界)には基礎研究のスキルを持っている人は沢山いても、臨床研究、疫学研究のスキルを持っている人は稀で、とりわけ質問紙調査やインタビューなどのスキルを持つ人はほとんどいないということです。臨床研究自体についてもそうですが、質問紙調査(しばしば「アンケート」と呼ばれます)やインタビューは、必要になる場面はそれなりにあるものの、誰でも出来る研究手法としても特段深く考えもせず、やり過ごされてきたというのが実情のようです。そのせいかわかりませんが、これらの手法を用いる研究に関して院内外で相談されたり、任されたりすることがあります。

3. 今後の展望

個人としては、医師のwell being(そのための仕事満足度や男女共同参画)や医療の質改善に資するような研究を今後も続けていきたいと思っています。卑近なレベルでは、臨床と研究や教育のバランスがもう少しよい働き方(働き口?)を目指しています。

医療疫学教室におかれましては、今後ともこの分野における数少ない人材育成の場として、院生のみならず、教員・卒業生にとっても生涯学習の拠り所となって下さること期待します。医療疫学教室の「個人の興味が尊重され、別の人の興味と緩やかに繋がっていく」「緩やかな連帯」とでも呼ぶべきものは、まだまだ封建的な医療界、特に医師の世界ではとてもユニークであり、美質の一つだと思っています。私自身もこれに随分助けられてきましたし、現在でも研究へのアドバイス(アイデアから現実的な助言まで)などをいただいています。ぜひこの“緩やかな連帯”を今後も大事にしてほしいと願っています。

医療疫学での私の旅

自身の病いをきっかけに、医療疫学に出会う

横山 葉子

【入学】平成17年度／専門職学位課程・博士後期課程（指導分野変更）

【現在】京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 医療疫学分野 研究員 認定NPO法人健康医療評価研究機構



Yoko Yokoyama

医療疫学の発足10周年にお祝い申し上げます。医療疫学そしてここで出会った先生方や研究室のみなさまとの出会いに、心より御礼申し上げます。

私は過去に、多くの人を経験するように病いの経験をしましたが、その間に感じた周囲の人のユーモアや深いやさしさは、私の人生に豊かな経験を与えてくれました。私の経験は、同じ病いを経験している人たちと話をするきっかけを与えてくれた一方、深刻な経験でなかったがために、それを探求したいという興味を持たせ、また一定の距離を保たせたという、絶妙なバランスだったのだと思います。その後、その経験や患者へのインタビューを通して考えてきたことを研究という形で発信したいと思い、自分の進む道を探していました。そこで医療疫学と出会う機会があったことを大変幸せに感じています。

医療疫学で学んだことは、一言でいえばバランスを取るということだったと思います。例えば、医療疫学における主要な研究テーマの柱と比較することで、興味を持ってきたテーマや取り組むテーマが全体の中でどのような位置づけであるのかを振り返る機会を得ることができ、全体とのバランスを考える機会になりました。また、研究のアプローチについても臨床研究に関わる機会を得ることができ、私自身の視点の広がりを持たせてくれました。特に、臨床研究に対して、実践に基づいた疑問から「知」を見出すことができるというところに一番の魅力を感じています。さらに、ライフワークの一つと考えている医師・患者関係というテーマにおいては、患者からの視点だけではなく、医師・医療者からの視点についても医療疫学における議論により接することができました。このことは大変貴重な機会であり、関係性を両者の視点からみる必要性について実感させられました。

このように医療疫学での経験は、明確な羅針盤を私に与えてくれたばかりでなく、研究あるいは人生の旅を続けるにあたっての、物事を探求する楽しさを感じさせてくれました。そして、時に混乱し、なかなか結果が見えない私を、広くあたたく見守ってくださった先生方、それぞれの価値観を尊重し合える仲間たちにも恵まれました。

今後は、バランスをとりながら量的研究と質的研究、医師・患者関係、経験と知の両者をつなげることを今後のテーマとして精進していきたいと思います。また、病いを経験している人やその周囲の人の苦痛を取り除くことに、そして彼らがそれぞれの夢を描けるようになるために貢献できる仕事をしたいと思います。そうすることで、これまで学んできたことを還元していきたいと思います。

5年間の思い出……そして……

私らしいアレンジで後進の育成をめざす

小野 玲

【入学】平成16年度／専門職学位課程・博士後期課程

【現在】神戸大学大学院保健学研究科 准教授



Rei Ono

この度は、医療疫学発足10周年おめでとうございます。10年という歴史が作られたのも、福原教授のリーダーシップと教授と旧・現スタッフの強い信頼関係によるものと確信しております。

私が専門職学位過程に入学したときは、医療疫学は解剖棟にあり、今のようにスペースは広くありませんでした。ミーティングも教授室の机で肩を寄せ合って行い、飲み物を置く場所に困ったことを記憶しています。その後、博士後期課程に進学し、医療疫学での在籍期間は5年となりました。長いようで短い期間ではありましたが、時代をリードする臨床研究を行っている先生方と、目的意識のある大学院生に囲まれ、刺激ある5年でした。不思議なもので「ふっ」と思い起こすと、楽しかった思い出よりも、悲しかった(or 苦しかった)思い出が蘇ってきます(もちろん楽しいこともたくさんありました……)。疫学実習で仲間と白熱した(?)議論をしたこと、専門職学位課程の課題研究発表会の準備で追い込まれたこと、ミーティングでダメだしをされたこと……なかでも、専門職学位過程でお世話になった鈴鴨先生、博士後期課程でお世話になった東先生と、私を指導してくださった先生方が次々と辞められていき、大量の涙が出るほど寂しかったこと(言い過ぎです……)などは、心に残る思い出です。

在籍中は、尺度開発や運動器疾患の疫学調査、調査研究の二次解析に関わらせていただきました。これらの研究を通じて、Research Question(RQ)の重要性を再認識するだけでなく、既存研究であっても視点を変えRQを立てれば、社会に寄与できるものができることを知りました。つまり、研究はホームランだけではなく、ヒットやバントも重要で、次に繋がる一打であることを学びました。このように医療疫学では研究に対するマインドやスキルをじっくり伝授いただきました。それだけでなく、教室運営、他職種との人脈など、私にとって多くの見えない財産をいただいたと感謝しております。

私自身、大学人として責任ある立場になり、ここで培ったことをさらに私らしくアレンジをして理学療法の領域において後進の育成を行っていきたいと思っています。医療疫学教室の皆様方には、今後さらに10年、日本の医学教育そして臨床研究教育をリードしてくださるものと期待しております。

医療疫学発足十周年に向けて

医療現場に戻って実感した医療疫学の有用性

杉岡 隆

【入学】平成17年度／医学博士課程 【現在】佐賀大学医学部 地域医療支援学講座 教授



Takashi Sugioka

医療疫学教室発足10周年を迎えるということで、まずは心よりお喜び申し上げます。研究経験ゼロでずっと地域の現場で診療をしてきた私は、40歳になってから医療疫学教室でお世話になることを決意しました。今から振り返ってもわれながら思い切ったことをしたのだと思いますが、何とか無事卒業できたのも、福原教授をはじめ医療疫学教室の先生方や皆様の懐の深さゆえと改めて感謝の意に堪えません。思い出はありすぎて紙面にはとてもおさまらないほどですが、自身の展望も含めて書いてみたいと思います。

医療疫学での4年間は長いようであつという間に過ぎた年月でした。学ぶことのほとんど全てが新しいことの連続で、特に最初の1年間(MCRコース)は目の回るような課題の量に圧倒されました。当時はまだ深夜・休日の教室利用が自由で、隣席の同級生と競って、誰もいない教室でキーボードの音のみを響かせながらレポート作成に励んだのが懐かしいです。通常であれば決してお目にかかれなような方々とお会いできたのも医療疫学教室ならではのことであったと思います。国内外で活躍しておられる著名な先生や自分と同じような立場で頑張っている人など、多くの方々から得た知識や見識は40歳を超えた私にも大きな影響を与えてくれました。また彼らの面白いエピソードや人間的な部分など語りつくせないほどの話題もいただくことができました。スタッフの充実という点も特筆すべき医療疫学の美点だと思います。各先生方、学生、秘書さんと、福原教授のお眼鏡にかなった素晴らしい皆様と和気あいあいとした雰囲気の中で、ともに時を過ごせたことは大変幸せだったと思います。研究計画の立て方からデータ収集のノウハウ、解析、論文作成に至るまで、親切にご指導いただき様々なサポートもしてもらいました。

卒業後は1年間、社会医療法人堀川病院に勤務しましたが、臨床現場に戻ってみてわかったのが、想像以上に多くの医療従事者がより良い医療・ケアを行いたいという理想を持って仕事をしているということでした。日々の診療を振り返りながら、少しでも前進しようとしている現場の医師や看護師たちにとって、医療疫学で学ぶ臨床・疫学研究の方法論やデータの解釈、倫理性などはとても有用で強く興味を引かれるものであると思います。医療疫学のさらなる発展のためにも、またやる気のある診療現場の人たちのためにも、今後より一層対外的な医療疫学の啓発活動が行われることが望まれます。この4月から佐賀大学医学部地域医療支援学講座教授として当地に赴任しておりますが、臨床を中心に研究や教育等ここで学んだことを少しでも地域医療に還元して医療疫学と共にさらなる発展ができるように頑張っていきたいと思っています。

医療疫学(MCR)在籍のインパクト

有村 保次

【入学】平成19年度／専門職学位課程・研究員

【現在】宮崎大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター（附属病院第3内科兼務）助教



Yasuji Arimura

1. 医療疫学在籍時の思い出

MCR入学直後は、講義や実習など忙しい毎日でしたが、それ以上に不慣れなグループワーク、ディスカッションやプレゼンテーションは私にとってストレスでした。しかしこれらの教育手法は、現在の私にとっては貴重な経験となっています。また、医療疫学在籍時に、同期5名（MCR同期4名と博士課程1名）でよくランチをしたことは、臨床から離れゆっくりと過ごした貴重な時間の一つでもありました。皆さん、お元気でしょうか？

2. 近況報告

MCR卒業直後の半年間は、所属する宮崎大学医学部附属病院第3内科の医員として、多忙な病棟医の毎日を送りました。とても京都で学んだことを活かせる状況にはなく、ただ医師不足を痛感させられました。その後、医療疫学在籍経験を買われ？てか、卒後臨床研修センターに呼ばれ、現在医学教育分野にも関わっております。おそらく、1診療科にとらわれない物の見方や考え方ができる医師が大学病院には少なく、選ばれたのではないかと考えています。正確には、文部科学省の「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」として採択された熊本大学病院が中心となって大分大学と宮崎大学の三大学病院が連携した「中九州三大学病院合同専門医養成プログラム」の選任教員として採用されたため、初期研修医の教育や研修支援のみならず、本学で初めての専門医養成プログラムの整理と可視化に取り組んでいます。

卒後臨床研修センターに配属されてからは、医療疫学時代に学んだことを周囲に還元できるような活動も始め、初期研修医には文献検索法、内科系大学院生を対象にした臨床研究勉強会も開始しております。また、本学の医学教育改革推進センターからは4年生の症候学講義の一部としてEBMに関する講義を依頼されるようになっていました。これらを通し、ようやく京都で学んだことを振り返る機会を得て、自分自身の学習のきっかけにもなっています。また、コンサルトを時々受けるようになっていますが、多くがデータを収集してからの解析の相談であり、まだまだ臨床研究についての認識は低いものだと思っています。臨床研究を推進しやすい環境ではないことは周知の事実ではありますが、少しでも環境を変えるべく、同じ言語が通用する「仲間」を増やしていくことが先決ではないかと思い、活動しております。

3. 展望

働く環境も落ち着かず、研究どころではなかったのですが、ようやく腰を据えて何かをできる体制になってきました。個人的には、MCR在籍時の課題研究も科学研究費を取得できましたし、まずは論文や学会発表等の実績をつくることが喫緊の課題と考えております。更には、医学教育分野において医学シミュレータを用いた教育効果の検討など、医学生や研修医を対象にした教育介入研究も新たに行っていきたいと思っています。

現在、研修医を支援する立場ではありますが、まだまだ臨床医としても未熟であり、学ぶべきことは多く、日々研修医とともに勉強しています。また、大学内では卒後臨床研修センターや医学教育改革推進センターなどこれまでになかった組織体系のもと、新たな風が起ころつつあります。その中の一端で仕事をするのも貴重な体験であり、また何かあるのではないかと期待して大学で勤務する喜びを感じています。MCR卒業からこれまでを考えると、医療疫学在籍は、自分にとって大きなインパクトでした。

医療疫学と心理学

社会に還元できる研究をめざして

脇田 貴文

【在籍】平成19～20年度／産官学連携研究員 【現在】関西大学社会学部社会学科 心理学専攻 助教



Takafumi Wakita

私の専門は心理学の中でも心理測定、心理統計で、主な仕事としては心理尺度の開発・研究をしています。私は医療疫学教室に2007年1月から2008年3月まで産官学連携研究員として在籍させていただきました。そして現在は、関西大学社会学部心理学専攻で助教として勤務する傍ら、「疫学実習」の非常勤講師として関わらせていただいております。

今回このような文章を書かせていただくにあたり、改めて医療疫学教室に在籍していた時のことを思い出してみました。やはり1番印象に残っているのは、医療疫学で出会った先生方、そして研究テーマに衝撃を受けたことです。先生や院生の方々がされている話は現実かつ切実な問題ばかりで、医学知識をまったく持たない私が聞いても研究する必要があるそうだ、もっと調査が必要ではないか、と思わせるものばかりでした。私の師である、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の野口裕之教授は「現実をみすえた研究」「小さなことであっても社会に還元できる研究」が重要と常々おっしゃっていました。まさにそのような研究ができる場が医療疫学教室であり、私にとって理想の研究ができる場所でした。これまで心理学しか学んでこなかったため、医療疫学での常識が心理学では常識でなかったり、またその逆もあったりと正直戸惑いもありました。例えば分析手法は同じでもその解釈やみるべき数値が異なることに驚いたことを鮮明に覚えています。現在は教室を離れておりますが、医療疫学での経験は私の視野を広げてくれるものでした。

医療疫学教室から離れた今も、先生方と一緒に現実をみすえた研究ができることは私にとって光栄かつ幸せであり、このような機会を与えてくださった福原教授に感謝致しております。医療疫学教室のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。

進化をつづける医療疫学分野

教員と学生が一体となり、新たな挑戦を

佐藤 恵子

【入学】平成19年度／博士後期課程

【現在】京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 医療疫学分野 研究員
(平成23年1月からグラクソ・スミスクライン株式会社 開発本部 疫学部)



Keiko Sato

私は、平成19年度に医療疫学分野の博士後期課程に入学しました。企業でアウトカムズ・リサーチ部門に所属しQuality of Life (QOL) 尺度の開発などに携わっていた私は、アウトカム研究の真髄に触れ、QOLに関連する研究をしたいという思いから、医療疫学で学びたいとずっと考えていました。

入学してしばらくの間は、先輩方の研究分野およびその研究手法の多様さから、研究の進捗を報告する場であるリサーチプログ्रेसミーティング(RPM)での発表やディスカッションの内容が理解できないことが多く、RPM終了後は必死に勉強したことを覚えています。また自身の研究報告の時には、先生方からの厳しいご指摘と自分のふがいなさに、思わず涙してしまう(!?)ような経験もありました。研究室でもまれていくうちに私のリサーチ・クエスチョンも少しずつ変わり(長い時間を要してしまったのですが)ようやく研究が形になってきました。入学してから今までの道のりは、全て自分の研究成果を社会に発信するために必要なプロセスだったと思っています。

このプロセスの中で、何度にもわたった私の拙い研究計画や解析の相談を、多忙なスケジュールの中で常に快く引き受けてくださった先生方と、いつも励まして下さった学生の皆さんに深く感謝しております。

医療疫学分野の教員は年々層が厚くなり、社会健康医学系専攻の中でも屈指だと思います。学生の研究計画や解析結果に対して、各教員がそれぞれの専門分野から新たな視点を提供し、検討が不足している部分について指摘をしてくださいます。また、統計解析手法や疫学研究の方法論などの講義レベルを超えた部分については、別途設けられるセミナーと教員の先生方からのご指導で習得することが出来ました。このような時期に医療疫学分野で学べたことは幸運だと思っています。また、一度ティーチング・アシスタントとして医療疫学分野が担当する疫学実習の講義に参加する機会をいただきました。毎回の講義資料作成の様子および全講義終了後の真剣な反省会での福原教授および担当教員の真摯な姿勢から、医療疫学分野が進化し続けることが出来る理由とそのための膨大な努力を垣間見たような気がいたしました。

教育・研究の両面にわたって日々精力的に活動されている福原教授のもとを巣立った臨床医や研究者が、今後の医療において重要な役割を担っていく一方で、これからも医療疫学分野は教員と学生が一体となって常に新たな挑戦をし、進み続けるものと思います。私自身は今後も何らかの形で医療に関わる仕事をしたいと考えており、学会・ジャーナルなど様々な場所で、医療疫学分野から発信される斬新かつrelevantな知見やエビデンスを目にすることを楽しみにしております。

プロフェッショナルに向けて

診療現場の声を捉えて分析、還元できる臨床医をめざす

次橋 幸男

【入学】平成21年度／専門職学位課程

【現在】京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 医療疫学分野 研究員

天理よろづ相談所病院 総合診療教育部 医員



Yukio Tsugihashi

私は平成21年度の医療疫学分野・臨床研究者養成コース(MCRコース)を修了しました。大学院入学までは医学部卒業後から5年間、奈良県の研修病院にて内科の初期・後期研修生活に奔走していました。そのような中で研修病院の先輩にあたる林野泰明先生(現:医療疫学分野准教授)の研修医向けの講演会がきっかけで医療疫学分野やMCRコースの存在をはじめて知りました。

私は学生時代から今に至るまで一貫して総合診療・在宅診療を中心とした地域医療に従事する医師を目指してきました。しかし経験を積み重ねるたびに、臨床現場にあふれる慣習的・制度的な医療を変革するためには、一人の臨床医として目の前の患者だけに対応するだけではなく、疫学的な広い視野を持ってより多くの集団にアプローチしていく必要性を強く感じるようになりました。臨床研究者の育成を掲げたMCRコースの存在は非常に魅力的であり、臨床研究の基礎を集中的に学べる、臨床に復帰しやすいなど臨床医の生活に配慮された教育課程であったことから、迷わずMCRコースの受験を決めたことを今でも鮮明に覚えています。

いざ大学院に入学してみると、充実したコースワークに加えて、研究室の教員や先輩の院生、さらに同級生のモチベーションの高さにも驚かされました。また医学部卒業後から病院という閉鎖的な社会しか知らなかった私にとって、医療疫学分野で過ごす毎日がとても新鮮でした。出身大学や所属に全くとらわれることなく、様々なバックグラウンドの学生が全国から集まり、臨床研究のみならず公衆衛生や健康政策の基礎を学ぶことができた他、社会人としてあるべきマナーについても教官や学生同士の交流を通じて学ぶことができました。

また、以前の私は現場の診療に不満や疑問があっても曖昧なままにして何も働きかけようとせず(働きかけるすべを知らず)日々の仕事に追われていました。診療現場を離れて第一線の研究者の方と接することで、これまでプロフェッショナルとして外部に情報を発信してこなかったこと、医療全体を改善させようとする意欲、自らの哲学に欠けていたことに改めて気づかされました。

今後の抱負としては、臨床医の視点から診療現場の声を捉えて分析し、最終的に診療現場に還元できるような医師でありプロフェッショナルを目指していきたいと考えています。入学してあっという間に1年間の過ぎ去りましたが、私の人生において医療疫学分野の関係者の方々と知り合えたことは、かけがえのない経験になりました。末筆ながら、30才にしてはじめて医師・臨床研究者というプロフェッショナルの在り方を私に教えて下さった福原俊一先生、そして医療疫学分野の諸先輩方に深謝いたします。

素晴らしい方々に囲まれて

大西 美穂子

【在籍期間】平成16-20年度／秘書



Mihoko Onishi

医療疫学発足10周年、おめでとうございます。

私は2004年から約4年半、秘書として勤務しておりました。私が入った当時は現在の新しい建物ではなく解剖センターの一部を借りているような状態で、教員と大学院生も少なくこじんまりとした教室でした。その解剖センターから現在の総合研究棟への引っ越しは今でも思い出に残っていることの1つです。引っ越しは4月のはじめで、箱詰め作業が年度末の事務処理と重なったためなかなか進まず、本当に引っ越しできるのか当日まで想像もつきませんでした。当日の朝になって福原先生のお部屋からみんなで必死に荷物を運び出したのを今でも覚えています。その後半年くらいは段ボールに囲まれながら仕事をしていましたが、新しくきれいな建物に移り環境も良くなり、これが医療疫学の新たなスタートなのだなと感じました。引っ越しは本当に大変でしたが、今ではいい思い出です。

その後、新しい建物に移ったのとほぼ同時にMCRコースが始まり人数も徐々に増え、大きな教室になりました。そのなかでとても印象に残っているのは、医療疫学の先生方、院生の皆さんの人間性の素晴らしさです。毎年全国各地から入学される方がいらっしゃいましたが、本当に皆さん温かくて優しく素晴らしい方々で、学ぶことも多く、私たち事務職員も毎日刺激を受けながら楽しく仕事をすることができました。それまでは医師の方と接する機会はあまりなく、正直近寄りがたいようなイメージでしたが、皆さん本当に温かい方々で、このようなお医者さんに診ていただけたら幸せだろうね、とよく秘書同士で話をしていました。「福原先生の周りには自然と素晴らしい方が集まってくる」というお話をよく聞きましたが、本当にその通りだと思います。これも福原先生のお人柄や、先生がお持ちの魅力によるものだなと思います。

今私は京都を離れて仙台の大学で秘書をしておりますが、医療疫学で学んだ秘書としての基本はとても役に立っています。たくさんの素晴らしい方との出会いも私の財産となりました。

医療疫学での4年半は、毎日忙しくもありましたが、そんな素晴らしい方々に囲まれて充実した楽しい日々でした。卒業された皆さん、異動された先生方は皆さん素晴らしい道に進まれていると伺っております。これからも優秀な人材を世に生み出して、医療疫学自体もますますご発展されることを心よりお祈りしております。